

オンライン〇〇再考

情報学研究科長 河原達也

4月7日に研究科長として、全学の入学式に臨席しました。1年前は卒業式も入学式も中止になりましたが、今年は両方とも行われました。みやこめっせの会場に約三千人参列した様子を壇上から眺めるのは壮観でした。入学式は、午前に学部、午後大学院の分を実施するのが通例ですが、今年は午後遅くに昨年度入学者の分も別途実施されました。1年遅れの入学式にどれほどの学生が来るのか、少し白々しい雰囲気にならないのか、心配したのですが、会場に入ってみると、先の2つに比べて参加者が多く、立ち見もかなりいました。最も驚いたのは、総長を先頭に我々が入場すると、大きな拍手が起こったことです。これは前代未聞のことでした。入学したにもかかわらず大学に来ることができず、つらい1年間を過ごしたことが察せられました。総長もご自身が学生のときに、学生運動のためほとんど教室に入らなかった経験を述べられ、共感をもって受け止められた印象でした。式自体は、総長の挨拶のみ20分ほどでしたが、前後に会場外で見た学生の様子も生き生きしていました。

その翌週には、対面で授業をしました。私が担当している研究科共通展望科目には約150名の聴講があり、オンラインでも配信することにしましたが、大半が教室に来ていました。このくらい大人数の講義であれば、オンラインで配信するのと変わらないのではないかと内心思っていたのですが、学生たちを目の前にすると話にも熱がこもりますし、即興でいろんなことが出てきます。小さい画面（しかも学生の顔が見えない）に向かって話すのとはずいぶん違うなど再認識しました。実に1年ぶりに、本来の大学の姿を感じた2週間でした。しかしながら、コロナ禍が再び厳しくなり、またオンラインに逆戻りです。

この1年、オンライン授業やオンライン会議など、様々なものがオンラインで行われるようになりました。冷静に考えれば、10～20年前のインフラやソフトでは、自宅や下宿で皆がオンラインの恩恵に浴することはできなかったのですから、情報技術の成果といえます。コロナ禍という思わぬ災難によるものでしたが、社会の大変革になりました。

1年前のこの巻頭言でも述べましたが、このオンライン変革について、この1年の経験を通じて感じたことを述べさせていただきます。

1. オンライン授業の意義はあるのか？

昨年度の当初、オンライン授業が導入された際に、戸惑いがありましたが、オンラインにもよいところがあると強調されました。例えば、チャットや「投票」の機能を用いることで、双方向性が高まるといった点です。私自身も当初は確かにそういう気がしました。しかしながら、月日が経過するにつれて、授業中に促してもチャットに書き込む学生は減っていき、終盤には皆無になりました。「投票」を実施しても、なおざりにやっている感じがしてきました。後期も冬頃になると、学生のエンゲージメントは明らかに低下し、布団やこたつで聞いている人もいるのだろうと想像しました（これは私の授業がまずいのかもしれませんし、

対面授業でも寒くなると出席者数は減ります)。最後の方は、少し考えるテストをオンラインで提出してもらうようにしましたが、これに対する学生の評判はわかりません。

よく考えれば、このようなツールは、教室でもパソコンかスマホで簡単に使えます。実際に先日の対面授業で実施して、それほど面倒でないことを実感しました。

会議や学会であれば、遠隔地や時間の関係で来られない人が参加できるメリットがありますが、学校の授業についてそのようなことは原則的にあてはまりません。そうすると、オンライン授業には(こういう非常時を除いて)意義が見つけれないのではと思います。ただし学生にきくと、オンラインの方がマイペースでできてよいという意見もあります。

2. オンライン会議の意義(?)

これに対して、オンライン会議となると話は違います。会議には様々な形態・議題・参加者の役割があり、すべての人がすべてにおいてフルにエンゲージする必要がないからです。私自身、研究科長になり、教授会や専攻長会議の議長を務めるとともに、膨大な数の学内の委員に割当てられ、各々の会議に参加することになりました。当初はオンラインで会議をすることに皆が戸惑い、設営・運営が大変でしたが、そのうち慣れてくると、使い分けるようになりました。すなわち、参加者の意見を率直にききたいときは対面で実施し、形式的には重要であっても粛々と(シャンシャンで)承認を得たいときはオンラインで行うようになりました。教授会や大学の評議会は後者の典型ですが、教授会においても重要事項を諮るときは対面で実施したいと思いますし、会議自体にあまり実質的な審議事項がなくても(と私が書くのも変ですが)、月に一度は顔を合わせる機会があった方がよいと思います。

昨年この原稿で、人事案件などの秘密投票が対面でないとできない点を書きましたが、別の部局の会議ではオンラインで投票を実施している場合もあります。そうすると、やはり1~2名はパソコンやブラウザのトラブルで時間内に投票できないことがあるのですが、それを棄権や白票と処理しているのには違和感を感じます(もし日本の国政選挙でそういうことになるとう問題になるでしょう)。

学内の会議だけでなく、学外の方との会議やミーティングもオンラインになりました。外国の方との会議も、皆がZoomを使うようになって手軽になったのは有難いことです。コロナ禍前は、国際学会の理事会は電話会議で行っていたので、聞き取りや発言が大変でした。オンライン会議のもう一つの効用は、容易に他の仕事ができることで(これも公言するのは憚られますが)、結果として時間の有効活用につながっているのも事実です。

しかし、オンライン会議は知った人どうしが粛々と案件を処理するには向いていますが、厄介な話をしたり、初対面の人と人間関係を構築するのは困難です。ではなぜ、オンライン会議で反応を示したり察したりするのが難しいのでしょうか。画面越しだと表情がわからないのと、対面のように相手の発話に相槌(「はい」や「へー」など)を打つと相手の発話と衝突するためです。したがって、無言で頷くしかないのですが、聞いていることはわかっても、同意しているのか、興味をもっているのかはよくわかりません。対面と比べて、

オンラインだとなぜ発話が衝突するのかは私自身の研究テーマにも関連しており、興味深いところです。

3. リモートワークをする分かれ目

この1年で世間ではリモートワークが盛んに推奨されました。しかし、本学では教員を除いて、ほとんど導入されていません。授業や会議はほとんどオンラインで行っているのに不思議ですが、依然として書類決裁が必要で、デジタル化が進んでいないためです。東京の方とオンラインでミーティングをすると在宅の方が多いですが、関西ではそれほどありません。研究科内の先生方でも在宅勤務をしているのは、大阪や神戸の方から通っている人が中心で、京都在住の方はほとんど出勤しています。私自身も左京区在住なので、この1年毎日通勤しました。出張がないので、約15年ぶりにバスの通勤定期を買ったほどです。

結局のところ、通勤時間（おおむね1時間以上）かかる人は、在宅勤務の方がその分の無駄がなくなり、そうでなければオフィスの方が仕事はかどるということではないでしょうか。

4. 学会のオンライン開催とハイブリッド開催の行方

昨年3月以降ほとんどすべての学会がオンラインで開催されています。ただし、開催の方法については様々なものが試行錯誤されています。録画したビデオを置いておくだけの方式、Zoomを使う方式、Gather.Townを使う方式、専用のプラットフォームを使う方式、などです。国際会議では時差の問題からプログラムの編成も容易ではありません。

遠くまで行かなくて済むようになったのは便利で、見かけ上の参加者は増えましたが、実際に聴講している数はかなり少なく、またその多くも他の仕事をしながらだと思われまます。また、参加者間の交流(networking)がほとんどできなくなりました。私自身、この1年で新たな知合いがほとんどできていませんし、若い人にとっては自分をアピールできる機会が減って深刻に思います。

しかし、コロナ禍が終息した後はどのようになるのでしょうか。今年の後半や来年に行う会議では、ハイブリッド開催の検討もしていますが、予算を立てるのが非常に困難なようです。規模の大きな会議では、会場を少なくとも1年前には予約する必要がありますが、どのくらい現地に來るのかわからないと、どのくらいの会場をおさえてよいのかわかりません。オンラインのプラットフォームも Webinar や会議専用のものだと結構高価で、結局これまでの予算の1.5倍くらいはかかるようです。しかも、オンラインの参加費を現地参加費と同額にするわけにもいかないのです。採算をとるのが難しいようです。

私がどうするかを考えても、招待講演を依頼された場合や役員を務めている場合を除いて、夏休み中であれば行くでしょうが、学期中に遠方に行くことはしないように思います。魅力的な場所なら行くけど、そうでないと参加者が減ることになるのかもしれない。

5. オンライン〇〇とフィルタバブル

私自身の経験でもそうですが、オンラインだと関心のある議事や発表しか聞かずに、後は他のことに簡単に移れます。そうすると自分の興味があることしか情報が入らない状態になります。これは、SNSなどによるフィルタバブルやエコーチェンバーと同様の現象です。

情報やメディアが増えていくばかりなので、フィルタが必要なのは明らかですが、そのフィルタが正しいかどうかを自分で検証するのは非常に困難です。安易なのは、自分が信頼できる人の意見に頼ることですが、そうするとそのネットワークから出られなくなります。高度情報化の結末がこうなってしまったことに愕然としますが、これこそ情報学の課題ではないでしょうか。

6. おわりに・雑感

コロナ禍はあっという間に拡散し、世界中で同じような光景になったのは国際化の進展によるものでしたが、国境閉鎖やワクチン確保の様相は結局、国の単位が第一ということを再認識させられました。世界中の人と簡単にオンラインで接続できるようになった反面、新たな出会いや人間関係の構築が難しくなりました。

出張も宴会もなく、まさに巣ごもりでした。研究科長で激務になるかと思いきや、実際のところ、時間に結構余裕があったのはそのおかげといえます。しかし、学生にはやはり深刻な影響があったと思います。昨年新たに研究室に配属された学生とはコミュニケーションが難しかったです。また、私がアドバイザーをしている学部学生とは学期はじめに最初の面談を行い、心配そうな人はその後も定期的にしていましたが、大丈夫そうだと打ち切った後に、授業に出られなくなった人が複数いて、自分の見極め能力にショックを受けました。したがって、本稿の冒頭に述べた入学式における感慨はひとしおでした。

現在はまだ不透明な状況ですが、今年度の後期には正常化していることを強く望んでいます。